発表タイトル	日本における諸科学の編成と基礎概念の検討： 文理統合研究の有効性を探る
発表者所属名	国際日本研究専攻 教授　／ 国際日本研究専攻 名誉教授
発表者氏名	稲賀 繁美（書類上の責任者） 鈴木 貞美（プロジェクト申請者）

◆日本における人文社会諸科学の展開と科学技術との関連を総合的に検討することを通じて、文理融合研究の有効性を具体的に示し、また、その有効な方法を開発することを目的とする。そのために、今日に至る日本の学術システムとその基礎概念の形成過程について、輸入先の西欧文化との価値体系の差異、それを受けとる際に働いた漢字文化圏における伝統、受け入れ時期や再編の歴史的条件などをよく勘案し、新概念の創始、流布、定着、再編を総合して考察し、東アジア諸国に輸出された学術編制と日本の近現代の独自の知的システムの役割の解明を行うことを基礎にすえる。

国際的、総合的な視野に立つ「知のシステム」再編制とはどのようにあるべきかについて、新たな方法を提案し、将来を展望した学術再編に向けて、具体的な提言を行う。とりわけ本プロジェクト期間内では、「エネルギー」「生命」「情報」「科学政策」の 4 つのキーワードを掲げ、広い視野と長いパースペクティヴに立ち、今日の研究教育の在り方を根本に立ち返って総合的に研究していく。それらの作業を通じて、国際的視野に立って文理融合研究を推進する若手研究者の育成を行うことも目的にしている。

◆研究代表者は全体の総括の立場として、全班に参加。各班の計画。

Ａ班(リーダー　金子務) 「エネルギー」の基礎問題

Ｂ班(リーダー　池村淑道) ゲノム／遺伝子組み換え技術と食の問題／原爆の影響と研究・資料の問題性など「生命」に関する基礎問題に関し、ゲスト・スピーカーを招致し、数度の研究会。オーラル・ヒストリーの編纂の検討。(国際)シンポジウムの開催。

Ｃ班(リーダー　中村康夫) 医学、バイオ、宗教美術文学のあらゆる学問体系に、情報学が必須な時代になっているが、さまざまな階層性を情報の観点からどのように捉えていくか、「情報」の基礎問題に関する数度の研究会。国立天文台やその他研究所でワンダリング・セミナー（出張オープンカフェ形式）を行う計画を具体化。

Ｄ班(リーダー　金森修) 「科学行政」の基礎問題に関する数度の研究会

① 戦後になって、国際的な環境問題を取り上げる際、各学問観の関係はどうなっているのか。日本の学者がどのようなスタンスをとっているのか？他国のスタンスとの比較。②理系の頭脳はどこにあるのか？独立行政法人の影響。③行政学をやっている人はいるが、科学行政史の研究はどうなっているのか？（海外との比較・・・海外では機能しているが、日本では機能していないなど)。④アカデミズムの内と外の問題。⑤内藤湖南など、中国史・中国学をやった人が、どうやって自分の中国観を取り入れたか。⑥昭和研究会が、どういう影響を政府に与えようとしたのか、など個別課題の検討。

② 海外で文理統合型学術総合化をめざしているチームの代表者を招へいした国際シンポジウムの開催。担当はプロジェクト代表者。

◆関連出版物

金子務・鈴木貞美（編）『エネルギーを考える一学の融合と拡散』作品者、2013 年

韓国語訳、朴美貞『에너지를 생각한다-학의 융합과 확산』민속원,2014 년

森洋久『情報とは何か』（非売品）2013 年

『文理統合研究の有効性を探る：総括シンポジウム 2013』（非売品、2013 年）

関連シンポジウム「International Meeting on Say about “Technology and Value of Brand” Jeju National University, Jeju, Korea, 29th–31 th May, 2014」